



この春号の特集は、園生活の「春」に最も際立つ問題、「安心」を取り上げた。もちろん、春に限らず、子どもの生活において、安心して過ごすことはいつも求められていることである。しかし、日本は春に新学期を迎えるという生活スタイルを持ち、大人にとっても子どもにとっても、安心した環境を共に手探りする特別な時期として「春」があるとも言える。

《視点》の三つの論文を読むと、保育における「安心」という言葉の捉えも、三者三様だ。岩田氏は「安心して遊ぶ」ことについて書かれ、子どもがじつくりとモノと対話して遊べる「安心」、そしてそれを支えるために「保育者も共にそのモノがどのようなものであるかを新たに知る姿勢、未知性に開かれている」ことが重要であると言われる。三浦氏は、春の進級時に「安心」の手前で子ども自身が揺れながら、その子どもらしく表現したり動きだしたりするのを温かく見守っている。菊地氏は、福島市の保護者の記録を紹介しながら、当たり前に外で遊べるということが、汚染されていない環境への「安心」を前提としていることに気付かせてくれる。福島の子どもの「外遊びしたい」という言葉は、人間の叫びなのである。体内線量の測定をする前夜に、「草むらに入っちゃったから」高く出るかも、と親につぶやいた小学生S君。それを聞く大人（親）の気持ちはいかほどにづらいだろう。

一方で、親の身勝手な「安心」のために子どもの「安全」を主張する風潮がある。《view》の入江氏は鋭く警告を発してくださった。(H)